

差出人:

日時: 2015年9月10日 12:56:49 JST

宛先:

件名: 今日は1964東京オリンピック最終聖火ランナー坂井義則さんの一周忌

今日は、51年前の東京五輪最終聖火ランナー坂井義則さんの一周忌です。
よかったら参考にしてください。

坂井義則さんがお亡くなりになる一年前、坂口泰先輩(現中電監督、世羅高OB、早稲田大OB)のご配慮でお直接お話をさせていただく機会を得られたことは望外の喜びでした。

以下、その時、坂井義則さんからうかがった秘話を改めて記させていただきます。

1964東京五輪最終聖火ランナー坂井義則さん(当時早稲田大1年)は70年前の昭和20年8月6日、原爆投下から一時間後に広島県内(三次市)で誕生したこと、三次高校時代、世羅高初代駅伝監督・内海富貴郎先生によって日本一に育てられたことにより、あまた数々の候補の中から最終聖火ランナーに抜擢されました。

抜擢したのは早稲田大学OBで元三段跳び世界記録保持者の小掛照二さん(上下町出身)。東京五輪日本選手団陸上監督でした。その抜擢を決裁したのは同じく早稲田大学OBでアムステルダム五輪三段跳び金メダリスト織田幹雄さん(海田町出身)。東京五輪日本選手団長でした。

坂井義則さんの聖火点火の所作を指導したのも当時の早稲田大学競走部監督中村清さんでした。

日本の戦後復興の象徴としての使命を担い、国立競技場の階段をかけ上り、聖火台に聖火を点灯した坂井さんはその後、アジア大会日本代表となり、アジアを制すなどトップアスリートとして活躍。

早稲田大学卒業後フジテレビに就職。スポーツメディアの世界で活躍し、昨年9月10日他界されました。

最終聖火ランナーにはすでに他の候補者が内定していたにも関わらず、坂井さんが抜擢されたのにはもうひとつの知られざる理由がありました。

それは、坂井さんを日本一の400m選手に育て上げた内海富貴郎世羅高初代駅伝監督が太平洋戦争中、将校として最前線の激戦地から多くの兵士を奇跡の生還に導いたことに起因しています。

内海監督によると奇跡の生還を果たした兵士には三つの共通点があったと云います。

ひとつ目は、持久力にたけていたこと。

ふたつ目は、思慮深さがあり洞察力にたけていた、つまり、能弁であるよりも聴く耳を持っていたこと。

三つ目は、信仰であれ、肉親であれ、恋人であれ、仲間であれ、決して裏切らない信ずる対象を持っていたこと。生きる力を超える生き抜く力を培う教育の実践こそが「世羅の駅伝」であり、「限りなき挑戦・世羅の魂」だったのでした。

最終聖火ランナー抜擢の要点として「50年後、100年後の未来にも決して風化、埋没しない理念」(織田幹雄氏談)の存在が伏線にあったと云います。

東京五輪から半世紀以上が経過した今日、高校駅伝の頂点に君臨し史上最強と称賛されることを見抜いていた先人の慧眼には驚き入るばかりです。



件名：生き抜く力を説き続けた内海監督

ありがとうございます。

「東京五輪最終聖火ランナーの真実」の簡単な resume は出来ているのですが、PowerPoint では登場人物の画像を入れたいと思っています。

坂井義則さんの最終聖火ランナー起用は原爆投下の日が誕生日であったこといい、それに白羽の矢を立てた小掛照二さん、決断した織田幹雄さんといい、まさにすべて広島つながりだったと云えます。

当時、最終聖火ランナーは織田さん、南部さんらにほぼ決まっていたにも関わらず、敢えて自らそれを覆してまで若きホープ坂井義則さんに委ねたところに大きな意義があったと思います。

とりわけ織田幹雄さんは「原爆投下の日生まれはアメリカを刺激しないか」という陸連幹部の反対派を振り切った決断だったと云います。故郷広島への熱い思いがそうさせたのでしょう。

坂井義則を日本一に育てた内海監督の南方出征は、敗色濃厚な大戦末期の教育要員将校であった故に冷静かつ客観的に「十九、二十の若者が玉砕して何になる。生きて帰ってこそ祖国の興国なり」と「生きて虜囚の辱を受けず」の戦陣訓を退け、部隊の将兵にかたくなに玉砕を戒め、「生還」を説いたと云います。

終戦を迎え、価値観が一変し物資の乏しい日本に、故郷に復員後「おめおめと生き延びた」という誹謗と自責の念、寂寥感を払拭するかのように陸上の指導を通じ「生き抜く」ことの教育に邁進。

初代及び第二回の全国高校駅伝連覇や坂井義則さんを日本一に育成した功績を親交のあった織田幹雄さんや南部忠平さん、小掛照二さん村社講平さんら陸上界の重鎮方は日本の戦後復興と重ね、その象徴として坂井義則さんの背中を押しました。

坂井義則さんの一周忌に先立って先日、小掛照二さんのご遺族が拙寺の位牌堂を参拝されました。



当山位牌堂には内海監督、小掛照二さん、坂井義則さん、円谷幸吉さんなど陸上界ゆかりの物故者の位牌をお奉りしております。(添付写真)

広島キワニスクラブの皆さまへ

いつも大変お世話になっております。前回、9月10日の例会では、私の未熟な卓話にお耳を傾けていただきまして誠にありがとうございました。上記は、当日、世羅町・修善院（坂井義則さんが眠っていらっしゃるお寺）の住職 神田敬州さん（高校の先輩）より頂戴したメールでございます。坂井義則さんから生前直接に、お聴きになられたことをもとに記されたとのこと、貴重な事柄に満ちており、心を動かされるばかりです。偶然にも手を合わせる機会に恵まれましたことを機に、坂井義則さんと、坂井義則さんを大舞台へと導いた人々の思いや理念を伝えるべく資料づくりのお手伝いを現在若干ですが、始めさせていただきます。例会での卓話に続き、当日届いた内容をそのまま、広島キワニスクラブの皆さまに謹んでお配りさせていただきます。

2015年9月24日 安川久美子